更に、高校3年生の最近3年間の平均値とも比較してみると、スポーツテスト全12項目のうち高専生が6項目、勤労青少年が5項目にあたり高校3年生を凌ぐ値を示すのに対して大学生は1項目もない。これも大学生の体力低下を裏づけるものである。

また、運動実施状況および運動実施時間の違いによる体力・運動能力について最近3年間の平均値をみると、大学生でも運動をよく実施する者の値は高く、運動しない者との差が非常に大きい。特に運動しない者の低値が顕著であり、大学生の体力低下は運動不足以外の何ものでもないことがわかる。

文部省の資料は国立大学生のみの標本であるので、これとの一致度を調べるため、多くの私立大をも含む大学体育連合調査の資料を用い、男子19才について昭和52・54・56年度の3年度について検討してみた。その結果、身長および体重は両者とも極めてよく近似したが、背筋力走り幅とび、ハンドボール投げ、1500m走はいずれも文部省の同年度の平均値より低い方に偏した分布傾向が認められた。このことは、サンプルの収集法に違いがあるためかも知れないが、私立大生を含めた大学生の体力は文部省の値より低い可能性が示すものといえるよう。

以上述べてきたように、最近の大学生の体力水準がかなり低い状態にあるということは大学体育を担当する者が断定に受け止め、反省すべきところは謙虚に反省し、現状をよりよくするための手だてを早急に、共に考えていくことが肝要である。

体力は日常の運動刺激の状態を正直に反映するものである。学生の健康や体力を向上させるために、むしろ運動の質・量ともに現状より増する必要性が痛感される。

大学の体育施設の現状

— 大学の体育実技に必要な施設に関する調査結果から —

山梨学院大学 石田 偉 丸

1. はじめに

全国大学体育連合では、さきに[1]「大学における保健体育の基本構想」を作成したが、その具体化に当り、大学における保健体育の効果をあげるためには体育施設の充実を図ることが重要であるとの観
大学の体育実技に必要な施設に関する調査

表1.

1. 大学名：

2. 体育実技履修学生数（S.59現在）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>前期</th>
<th>後期</th>
<th>前期</th>
<th>後期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>定員数</td>
<td>1年</td>
<td>2年</td>
<td>名</td>
<td>計名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3. 施設と種目名

<table>
<thead>
<tr>
<th>施設</th>
<th>内容</th>
<th>面積に正規のゲームコート数で利用している種目名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>陸上競技場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>サッカー場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ラグビーや場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>野球場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>多目的運動広場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ゴルフ練習場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ゴルフ場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ホッケー場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>アーチェリー場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ハンボール場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>テニスコート（硬）</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>テニスコート（軟）</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>バレーボール場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>バスケットボール場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総合体育館</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>種目別</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>”</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>”</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ボーリング場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>柔道場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>剣道場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>多目的道場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>弓道場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>室内プール</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>遠外プール</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>射撃場</td>
<td>専兼</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

4. 教員数と担当コマ数

<table>
<thead>
<tr>
<th>教員数</th>
<th>時期</th>
<th>実技</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>専任</td>
<td>名</td>
<td>コマ</td>
</tr>
<tr>
<td>非常勤</td>
<td>名</td>
<td>コマ</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>名</td>
<td>コマ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

5. 選手の実技履修法（実技単位の与え方を簡明に）
点から、各大学が体育施設を整備充実するための目標を提供するために基準策定を企画し、昭和50年に（2）「大学における体育施設の基準」を公にした。
それにあわせて10年が経過したが、その後のわが国の大学における体育施設はどのように変化したであろうか。最近（昭和57年）行われた全国大学体育連合について（3）調査によれば、「一般保健体育の体育実技で効果を妨げる原因」として、「施設・設備の不十分」をあげた大学が約7割に達していることがわかった。このことから、かって全国大学体育連合が各大学の体育施設が少しでも良くなることを願って「大学体育施設基準」を作成したにかかわらず、これから10年、果して各大学の体育施設は少し改善されなかったのであろうかという疑問を持たざるを得ない。
そこで今回は、全国大学体育連合は施設検討委員会の名で「大学の体育実技に必要な施設に関する調査」を行い大学における体育施設の現状を明らかにすることになった。
以下今回の調査結果をもとに施設基準策定以前の状況と比較しながら、現状を明らかにしたいと考える。

2. 今回調査の目的
従って今回行われた調査の目的は日本の大学における体育施設の現状を明らかにすることであるが、これによって、さきに作成した「大学体育施設の基準」を見直し、改善の方法を検索しようとすることもできる。

3. 調査の方法
表1のような調査用紙を郵送し、回収した。

4. 回収状況
表2の通りである。調査時期が悪かった為か回収数が少なかった。

<table>
<thead>
<tr>
<th>大学種別</th>
<th>依頼数</th>
<th>回答数</th>
<th>回答率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>国公立大学</td>
<td>総合</td>
<td>50</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>単科</td>
<td>31</td>
<td>10</td>
<td>32.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>私立大学</td>
<td>総合</td>
<td>67</td>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>単科</td>
<td>111</td>
<td>34</td>
<td>30.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>国公私立短期大学</td>
<td>117</td>
<td>24</td>
<td>20.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>376</td>
<td>108</td>
<td>28.7%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

5. 調査結果から見た体育施設の現状
調査結果のうち、体育施設の必要性の基本的条件である実技履修法、履修学生数、開講種目等については別の機会に示すことにして、今回は現在各大学が保有する

(1) 全国大学保健体育協議会（全大体育連合の前身）大学体育指導者研修会資料 昭和46年
(2) 全国大学体育連合報告書 P.97 昭和50年
(3) 青山ほか、大学保健体育に関する調査の集計結果について、大学体育18号 P.34～42 （社）全国大学体育連合 昭和58年 3月
る体育施設の現状に焦点を絞り、昭和43年調査による資料と比較しながら検討して見たいと思う。

1) 4年制大学における体育施設の保有状況とその推移（表3）
(1) 屋外施設 現状は表3-1の通りであるが、これを昭和43年調査と比較すると一般に次のようなことが言えると思う。
専用の陸上競技場の保有大学数にはあまり変化が見られないが、専用サッカー場、ラグビー場に若干の増加が見られる。

表3-1 室外施設

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>施設名</th>
<th>陸上競技場</th>
<th>サッカー場</th>
<th>ラグビー場</th>
<th>野球場</th>
<th>運動広場</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>高等校</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
</tr>
<tr>
<td>43年国公立</td>
<td>数</td>
<td>19</td>
<td>40</td>
<td>28</td>
<td>64</td>
<td>19</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>21.8</td>
<td>46.0</td>
<td>32.2</td>
<td>5.7</td>
<td>72.7</td>
<td>21.6</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>私立</td>
<td>数</td>
<td>54</td>
<td>49</td>
<td>9</td>
<td>63</td>
<td>51</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>15.6</td>
<td>38.3</td>
<td>46.1</td>
<td>10.2</td>
<td>49.6</td>
<td>40.2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>全</td>
<td>数</td>
<td>38</td>
<td>89</td>
<td>87</td>
<td>18</td>
<td>127</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>18.1</td>
<td>41.4</td>
<td>40.5</td>
<td>8.4</td>
<td>59.1</td>
<td>32.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3-2 屋外コート

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>施設名</th>
<th>テニスコート</th>
<th>バレーボールコート</th>
<th>バスケットボールコート</th>
<th>ハンドボールコート</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>高等校</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
<td>専</td>
</tr>
<tr>
<td>43年国公立</td>
<td>数</td>
<td>77</td>
<td>9</td>
<td>2</td>
<td>59</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>87.5</td>
<td>10.2</td>
<td>2.2</td>
<td>67.8</td>
<td>22.9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>私立</td>
<td>数</td>
<td>98</td>
<td>18</td>
<td>13</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>78.0</td>
<td>14.0</td>
<td>10.1</td>
<td>59.5</td>
<td>24.6</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>全</td>
<td>数</td>
<td>175</td>
<td>27</td>
<td>15</td>
<td>134</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>80.6</td>
<td>12.4</td>
<td>6.9</td>
<td>62.9</td>
<td>23.9</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3-2 屋外コート

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>施設名</th>
<th>テニスコート</th>
<th>バレーボールコート</th>
<th>バスケットボールコート</th>
<th>ハンドボールコート</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>高等校</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
<td>専</td>
<td>無</td>
<td>専</td>
</tr>
<tr>
<td>59年国公立</td>
<td>数</td>
<td>28</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
<td>11</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>96.6</td>
<td>0</td>
<td>3.4</td>
<td>37.9</td>
<td>13.8</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>私立</td>
<td>数</td>
<td>51</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>94.4</td>
<td>0</td>
<td>5.6</td>
<td>16.7</td>
<td>16.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>全</td>
<td>数</td>
<td>79</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>95.2</td>
<td>0</td>
<td>4.8</td>
<td>24.1</td>
<td>15.7</td>
</tr>
</tbody>
</table>
ただし、従来の運動広場（今回の調査はこれを多目的運動広場とした）がやや減少しているので恐らくは従来の運動広場の整備によるものではないのかと思われる。

ここで最も大きな変化と思われるのは専用の野球場の増加（約25％から50％）と“その他の施設”（ゴルフの練習場、アーチェリー場など）の増加である。

(2) 屋外コート（表3－2）

バレーボール、バスケットボールなど現今では主として室内で行われるようになったスポーツ施設は後述するように体育館の普及で減少し、なかでもバスケットボールの屋外コートはほとんど無くなっているようである。しかしバレーボールコートの減少は約60％から30%程度でなおまだ若干使用されている。また従来あまり無かったハンドボールコートの増加が若干目につくようである。

(3) 屋内施設（表3－3）

屋内施設において最も驚くべき変化はほとんどすべての大学で体育館を保有するようになったということであろう。ただし今回の調査は連合加盟大学のみに行ったものであるから未加盟大学を考慮すれば絶対ではないかも知れない。しかし、ともかく体育館の普及はめざましいものがある。また柔・剣道場の保有大学の増加も著しく、国公立大学で柔道場では約50％から80％、剣道場は約40％から70％と可成りの増加が見られる。これに対し私立大学では柔道場は約40％から60％、剣道場は約30％から40％とその増加率はやや低い。次に専用卓球場の増加は私立大学に多く見られ、弓道場の増加は国公私の別なく増加している。最後にプールの保有状況であるが、国立大学の増加が著しい。

2) 短期大学の保有する体育施設とそ
の推移（表4）

（1）屋外施設（表4-1）
今回の調査では回収数が少ないので、明確には言えないが、短期大学の屋外施設の減少はおそらく小さくないと思われる。

（2）屋外コート（表4-2）
4年制大学と同様に従来のバレーボール、バスケットボールのコートはほとんどなくなり、ただひとつ目につくのはテニスコートの増加である。

（3）屋内施設（表4-3）
これも4年制大学と同様、体育館の増

表4．短期大学の保有する体育施設とその推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>施設名</th>
<th>陸上競技場</th>
<th>サッカー場</th>
<th>ラグビー場</th>
<th>野球場</th>
<th>運動広場</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
</tr>
<tr>
<td>43年</td>
<td>国立</td>
<td>数</td>
<td>17</td>
<td>56</td>
<td>72</td>
<td>4</td>
<td>22</td>
</tr>
<tr>
<td>43年</td>
<td>国立</td>
<td>%</td>
<td>11.7</td>
<td>38.6</td>
<td>49.7</td>
<td>3.0</td>
<td>16.7</td>
</tr>
<tr>
<td>59年</td>
<td>国立</td>
<td>数</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
<td>20</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>59年</td>
<td>国立</td>
<td>%</td>
<td>0</td>
<td>16.7</td>
<td>83.3</td>
<td>0</td>
<td>8.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表4-2．屋外コート

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>施設名</th>
<th>テニスコート</th>
<th>バレーボールコート</th>
<th>バスケットボールコート</th>
<th>ハンドボールコート</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
<td>無</td>
</tr>
<tr>
<td>43年</td>
<td>国立</td>
<td>数</td>
<td>93</td>
<td>45</td>
<td>26</td>
<td>68</td>
</tr>
<tr>
<td>43年</td>
<td>国立</td>
<td>%</td>
<td>56.7</td>
<td>27.4</td>
<td>15.9</td>
<td>40.5</td>
</tr>
<tr>
<td>59年</td>
<td>国立</td>
<td>数</td>
<td>18</td>
<td>0</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>59年</td>
<td>国立</td>
<td>%</td>
<td>75.0</td>
<td>0</td>
<td>25.0</td>
<td>8.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表4-3．屋内施設

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>施設名</th>
<th>体育館</th>
<th>柔道場</th>
<th>剣道場</th>
<th>卓球場</th>
<th>弓道場</th>
<th>プール</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
<td>無</td>
<td>有</td>
</tr>
<tr>
<td>43年</td>
<td>国立</td>
<td>数</td>
<td>102</td>
<td>59</td>
<td>9</td>
<td>17</td>
<td>106</td>
</tr>
<tr>
<td>43年</td>
<td>国立</td>
<td>%</td>
<td>63.4</td>
<td>36.6</td>
<td>6.8</td>
<td>12.9</td>
<td>80.3</td>
</tr>
<tr>
<td>59年</td>
<td>国立</td>
<td>数</td>
<td>22</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>23</td>
</tr>
<tr>
<td>59年</td>
<td>国立</td>
<td>%</td>
<td>91.7</td>
<td>8.3</td>
<td>4.2</td>
<td>0</td>
<td>95.8</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※ その他の説明
(1) 屋外施設 ゴルフ練習場、アーチェリー場、ホッケー、アメフト、馬場……
(2) 屋外コート 昭和43年不明、今回なし。
(3) 屋内施設 テレーニング場、射撃場、多目的道場、ダンス場……
5. おわりに
大学の体育施設の現状は4年制大学においては可成りの増加が見られる。とくに体育館の普及は著しく、ほとんどの大学が保有するようになった。しかし、なお現場からさきの調査のように不十分の声が聞かれるのはなぜであろうか、たしかに短期大学の状況は切実である。4年制大学の場合はこの調査では明確ではない。おそらくその原因は体育施設はできましたが、これを使用する学生数の増加が、これを上まわっているのではないか。すなわち、形の上で施設はそろったが、その大きさ及び附属施設や設備の不足を考えられる。昭和42年ごろから日本の大学生の増加は著しく、今日まで大学によっては数倍にも増加したであろう。これに伴って教員の増員、体育施設の増設は充分行われたであろうか。学生増に必要な校舎と運動施設はよくうらはらの関係になることが多い。グランドをつぶして校舎を建てようとする考えが、国公立大学のみならずとくに私学や短大には多いのではなかろうか、今後はそれぞれの大学の体育施設学生数に対する適切な体育施設の在り方について、更に検討する必要があると考えられる。

障害学生に対する大学体育
「健康スポーツを教材にした内科系疾患学生への体育実技指導」
進藤宗洋（福岡大学体育学部運動生理学研究室）、共同研究者：田中宏敏、田中守（福岡大学体育学部運動生理学研究室）、山本勝昭、徳島了（福岡大学体育学部体育心理学研究所）、梶山彦三郎（福岡大学体育学部運動学研究所）、佐々木靖（福岡大学医学部第二内科）
福岡大学においては、体育学部教務委員による保健コースのガイダンスから始まり、健康管理センターでの履習希望受付と学医の紹介、学医による診察と運動の可能性のチェックというような手順を経た後、体育実技担当者が履習学生を内科系班と外科系班に分け、内科系班は脈拍数毎分120〜130拍強度（運動直後15秒間の脈拍数30拍前後）におき、ゲームに熱中し、また練習により技能が向上して